

特集

先人に学び

農業の未来をひらく



公募により昭和52年8月11日制定。左の円形で秋田の頭文字「ア」を表し、右の円形で若芽の伸びる姿を图案化したものです。また、このふたつの輪が農業県秋田の限りない躍進と県民の和を象徴します。

作者／鈴木晴夫氏
(秋田市)



石川理紀之助翁
(木村秀夫氏 H20寄贈)

寝て居て
人を起こす
事勿れ

石川理紀之助翁は生涯にわたり、多くの名言や格言を残しました。代表的なものが、明治21年(44歳)、井上馨農商務大臣の招請を受けて上京し、郷里の農業改革の実績を報告した際に披瀝した14ヶ条の信条、すなわち「経済のこ」とば」です。この訓言は、農業や企業経営に携わる人たちのみならず、現代人全般に向けたメッセージとして今も語り継がれています。

意・自分は動かないで他人にやらせてはいけない。自分が先頭に立って手本を示し、人を動かすこと

令和初となる「農業の祭典」、第142回秋田県種苗交換会が、10月30日から7日間にわたって大館市樹海体育館(タクミアアリーナ)を主会場に開催されました。

キャッチフレーズは「集え大館 令和に紡ぐ 秋田の農業」、明治11年(1878年)から戦時中も途切れることなく開催されております。福原淳嗣大館市長は「令和初となる交換会が大館市で開催されることを歓迎し、皆さんと一緒に秋田の農業の魅力を伝えたい。」とあいさつ。

期間中は、県内各地で丹精込めて作られた農産物の展示や県学校農園展、農業機械化ショーのほか、郷土芸能発表会や飲食物露店販売など様々な行事や催事が行われ、交換会を楽しもうと県内外から81万1000人(主催者発表)が会場を訪れ成功裏に終わり、秋田の農業が令和の時代に継承されました。



新穀感謝農民祭は厳かな雰囲気の中で



第142回秋田県種苗交換会開幕



多数の組合員の皆さまから農業機械課の送迎バスを利用して頂きました。



ドーム内で行われた機械化ショー。



秋空の下、植木苗木市で品定め